

【資料2】

平成26年度 佐賀県立武雄青陵中学校 学校評価結果

1 学校教育目標
高い志と未来を切り拓く力を持ち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する。

2 学校経営ビジョン
併設型中高一貫教育校として、6年間の計画的・継続的な教育活動の中で、生徒一人一人の能力を最大限に引き出すよう多様で柔軟な教育の実践をめざし、学業・部活動の充実、さらに情操豊かな生徒の育成を果たす。こうした中で、生徒・保護者・地域の期待に応える教育を実践し、明るく風格ある学校づくりを推進する。

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
①6年間を意識した中高一貫教育の実践とその検証 ②社会で活躍できる情操豊かな生徒の育成(より行きたい学校へ) ③地域社会が期待する先進的な授業づくりと学校づくり	「本校に入学してよかった(入学させてよかった)」とする生徒が94.4%、保護者が92.1%であり、昨年と同様に高率であったことは、本校教育活動が生徒・保護者・地域の期待にある程度応え続けてきていることの評価だと考える。このことは、本校の評価項目に対する達成状況からも伺い知ることができる。ただ、生徒が自律的に学習する姿勢や善行活動を自ら率先して行う姿勢等については、本年度の方策では満足できる状態には達していない。今後、多様な生徒に対応する取り組みが必要である。

5 総括表							
①6年間教育を意識したより高い進路意識の醸成(学力向上・体験活動の充実)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題	
学校運営	○教職員の資質向上	授業力アップの研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業研究会(含ICT活用等)を年間2回以上実施する。</li> <li>他校の授業を年間1回以上参観し、授業法の改善をはかる。</li> <li>6年間を見通した教科指導を推進する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教科で作成したICT活用シラバスをもとに実践する。</li> <li>個に応じた分かる授業を展開する。</li> <li>武雄高校との授業研究会を実施し、指導の一貫性について研修を深める。</li> </ul>	B	武雄高校との相互の授業研究会の実施、全教科での教科研究会実施及び公開授業時の分科会開催、ICT活用研修会の実施を行うことができた。6年間を見通した指導については、今後一層研究を深める必要がある。	各教科の特性に合わせた授業研究や、中高のみならず小中高の教科指導法の研究を実施し、6年間の指導スタンスの確立を模索する中で、確実に全職員の授業力アップが図られた。さらに、本校の新しい取り組みであるICT活用教育が4年目に入り、教職員の授業力も確実に向上してきた。今後、ICT活用を継続しつつ、アクティブラーニングについても研究し、個に応じた指導を目指したい。
学校運営	○学校事務	教育環境の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>校内予算配分を5月中に行い、早めの予算執行に努める。</li> <li>予算の効率的な有効活用を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各分掌、教科、学年主任との連携を図り、ICT活用を含む教材等の選別を行う。また、校倉、備品等の補修、維持管理を行い学びやすい環境づくりをする。</li> </ul>	A	予算配分の為の調査を5月に行ったことにより、分掌主任や教科主任等と必要な教材類の選別や学校全体の予算の把握等検討する機会を多く設けることができ、適正かつ有効な配分及び執行ができた。	早めの予算配分により、職員の要望に迅速に対応でき、教育環境づくりに取り組むことができた。また、年度後半よりスタートした「世界とつながる佐賀県青少年交流推進事業」に予算面で貢献できた。今後も教育環境の充実を目標に、施設及び設備について計画的整備に努めたい。
教育活動	●ICT活用教育の推進	ICT活用教育の検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICT活用による授業実践を毎週1回以上行う。</li> <li>武雄高校とWebで3回以上交流を行う。</li> <li>ICT活用の研修を毎月行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相互授業参観を行い、指導力向上に努める。</li> <li>アンケートを実施し、授業のフィードバックを行い、デジタル教材を用いた授業の改善をはかる。</li> <li>武雄高校とのWeb会議やWebチューターでの交流を企画し、実施する。</li> </ul>	A	約87%の生徒がICTを活用した授業に興味を持って取り組むことができた。ICT機器の操作に慣れ、学習に生かすことができたと感じている。職員側でも、ほとんどがICT活用による授業を行い、指導力向上・授業改善に努めたと答えている。一方、ICT活用教育が興味・関心を高めるのに有効だと考えている保護者は86%程度、学力向上のために有効だと考えている保護者は75%程度にとどまっている。	職員は、生徒の学力向上に向けてICTを有効に活用しようという取組を行うようになっており、ICT活用教育に対してより前向きになっている。生徒もICT活用教育に興味を持ち、学習に生かそうとしている。授業以外の場面でも、プレゼンテーションを積極的に利用している。ただし、保護者の十分な理解を得られるまでには至っておらず、生徒の学力向上を実感してもらえない結果を出していく必要がある。そのためにも、どの場面で何をどう使うかをさらに研究していかなければならない。
教育活動	●学力向上	家庭学習習慣の定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業以外の学習時間を平日2時間以上、休日4時間以上。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SDノート等を利用して、家庭学習時間を調査し、全体および個別に指導を行う。</li> <li>効果的に各種テストを行い、家庭での学習量増加を図る。</li> <li>生徒会との連携により、自発的学習態度の向上を促す。</li> </ul>	B	家庭学習を頑張っていると思う生徒の割合は、昨年と比較すると全般的にやや減っている。また子どもが頑張っていると思う保護者数も微減。まだまだ学習への意識を啓発する必要がある。	学習や宿題の意義について適宜適切に指導することができた。 授業や課題についていけない生徒の固定化は解消されていない。担任や教科を中心として根気強い支援と方法の工夫等今後とも続けていく必要がある。部活動との両立、メリハリのある時間の使い方ができるよう、多角的な指導を継続したい。

教育活動	●学力向上	指導方法の工夫改善	・青陵タイムテストを月3回以上実施する。 ・各種テストの成績分析会を各学期ごとに1回実施する。	・生徒の学力の推移を的確に把握し、面接等で指導を行う。 ・各種テストの結果を各教科・学年で分析し、次の指導方法を検討し実践する。 ・日々の課題や週末課題および小テストを課し、生徒の理解の深化および知識定着を図る。 ・放課後及び長期休業中の学習会等を実施し、より直接的、具体的な学習指導を行う。	B	模擬試験をはじめ、各種テストの結果を分析し、指導を強化すべき点を客観的に把握しながら、授業内容および方法の改善に取り組んでいるが、まだ十分ではない。数値上は、生徒の95%、保護者の90%が授業への満足感を示している。	模擬試験の結果分析後に、全職員への周知、課題の共有等の対策を行った。 3年生の習熟度別展開授業では、生徒の学力レベルに応じた取り組みによる効果が表れている。T. T. や少人数指導の形態も含め、効果の検証を行い、更に改善したい。
教育活動	○中1英・数の学習環境改善	基礎学力の定着	・第2回目の学力推移調査において、全国偏差値の平均が50を超えるようにする。	・英語・数学の全時間でTT授業を実施し、理解が遅い生徒への補充学習等を行う。 ・課題を確実に行うように、学級及び教科で指導を行う。	A	TT授業を生かし、課題の指導を学年全体で行った結果、当該学力推移調査において、全国偏差値英語54.5、数学50.9と、2教科とも目標を超えた。	学年全体としての課題提出率はかなり高いが、学習習慣の確立および課題の提出状況が十分満足できるものではない生徒も一部いる。授業と家庭学習の有機的なつながりを意識させて、より高い次元での自律的な学習習慣の確立を目指す。
教育活動	○中高一貫	武雄高校との連携	・武雄高校との合同の行事を年間に3回以上できるようにする。 ・武雄高校との連絡会や情報交換会を学期に1回以上実施する。	・武雄高校との中高一貫推進委員会を学期に1回ずつ実施。 ・中高合同開校記念遠足(5月)の実施 ・夏休みに中学3年生の高校の体験学習の実施。 ・夏休みにジョイントスタディの実施。 ・11月に、中高一貫教育授業参観・相互研修会を実施。 ・12月に探究の合同発表会の実施。	B	中高交流において、職員の中には有効性にやや疑問を持ち、指導等十分に生かすことができていないところがあると感じている。一方で、95%近くの生徒・保護者は、本校への入学を満足と感じており、前年度よりわずかながら増加をしている。	今年度は、中高での交流として、高校の発表会や講演等に高校へ赴いての参加やweb回線での視聴を行うことができた。ジョイントスタディについては、職員の評価も高く、生徒も1日2時間の交流では、物足りないと感じている生徒も多い。また、中高一貫教育推進委員会も、軌道に乗り、情報交換や意見交換が活発に行われるようになってきた。さらに、「交流」としての取り組みでなく、「連携」を意識した取組が中高一貫教育の成果をさらに上げるものとする。
教育活動	○体験活動	自ら学ぶ生徒の育成	(3年)・探究I(国際探究・自然探究・未来探究)の活動を通して、自ら学ぶ姿勢や能力を育成する。  (2年)・探究(平和学習・進路学習)の時間において、調査や体験活動を通して自ら学ぶ姿勢や能力を育成する。	(3年)・テーマについて探究させることで、生徒の知的好奇心を喚起し、自ら学ぶ姿勢や学ぶ能力を育成する。 ・関西への修学旅行で日本の歴史・文化を肌で感じさせ、それを未来探究へと繋げ、卒業論文としてまとめる。 (2年)・長崎市内を自主研修することで、自主性や協調性、計画性を身に付けさせる。・職業への関心を高めることで、将来の見通しをもち、その実現に向けて努力しようとする態度を育成する。	A	国際・自然・未来探究共に、設定した課題やテーマに沿って学習を進めることができた。答えた生徒が多かった。	一人一台のタブレットパソコンの所持により、調べ学習がスムーズにできている。また、APUや修学旅行時の自主研修など、体験をしながら学べることで意欲の喚起につながっている。国際探究・自然探究は自らの興味・関心に従い、積極的な学習ができていた。未来探究も良い評価である。今後の課題としては、情報を収集した後の資料活用能力やまとめ方の工夫のレベルアップをはかり、より充実した活動を目指す。

②社会で活躍できる豊かな人間性の創造(基本的生活習慣の確立・部活動の振興・読書活動の推進・体験活動の充実)

領域	評価項目	評価の観点(具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題	
学校運営	○教職員の資質向上	研修会の充実	・内部講師による研修会を2回以上実施する。 ・外部講師による研修会を実施する。	・本校に勤務し、経験豊かで指導力に富む教師を講師とし、社会で活躍する豊かな人間性を創造する教育の実践方法の共有化をはかる。 ・外部講師を招き、人間力アップの方策を研修する。	A	ICT・セクハラ・食物アレルギー等に関する内部講師による研修が実施できた。また、人権(命に関する講話)・教育相談・特別支援などに関する外部講師による講演を2回以上行い、ICT教育を含めた教育における人間力の重要性に気付かせる研修を行った。	心の教育に精通した外部講師による研修もその技術とともに教職員の本質的な資質向上に大きな成果を残した。このような研修の成果は受け手側の感性によって大きく差が出るものである。したがって、今後さらに個々の教師の自律的な姿勢を喚起する職場の雰囲気づくりに努めていかなければならない。

教育活動	●心の教育	規範意識の醸成	・学校行事や道徳の授業を充実させ、自己のよりよい在り方を考えさせる。	・学年や他学年との情報交換を密に行い、生徒理解に務める。 ・2学期にふれあい道徳の公開日を設定し、保護者とともに、人間としての在り方を考える機会とする。	B	道徳の授業、日頃の指導並びに臨時集会等により規範意識は醸成されてきている。ただ、「ふれあい道徳」の保護者参加率は25%程度で低いが、平日でもあり止むを得ないところがある。	日常の観察や会話、日誌などで生徒の状況を把握し道徳の時間や学校生活の場面で適切に指導していくことができた。また、「ふれあい道徳」では、狙いに沿って各学年で連携をとって、工夫した授業展開をすることができた。
教育活動	●心の教育	読書活動の推進	・良質な本に数多く触れることで心豊かな生徒を育成するため、図書館の年間貸出総数8000冊以上を目指す。	・多数の教員による選書を通して、良質な本を多く購入するとともに、学校だより等で生徒達に読ませたい本を紹介する。 ・2ヶ月に1回図書館便りを発行し、図書館にある本を紹介して、生徒が図書館に足を運ぶようにする。 ・朝の読書で学級文庫を活用することによって、貸出冊数の増加を図る。	B	今年度の貸出冊数7598冊(4月～1月)であり、1人あたりでは前年度より少し増加している。一斉読書と家庭での読書習慣とのつながりは、昨年同様薄いようである。また、宿題をこなすことが負担で、読書ができないという生徒もいるようだ。学習をホリスティックにとらえる視点も今後必要であろう。	昨年度と比べ、1人あたりの貸出冊数はほぼ同じである。その理由としては、2ヶ月に1回の図書館便りの発行、生徒の感覚を生かした図書室内のレイアウト、学級文庫の活用などが考えられる。ただよく読む生徒とそうでない生徒の差もはっきりしており、朝読書を通して、更に「よく読む生徒」の数を増やしていきたい。
教育活動	●心の教育	善行活動推進	・生徒会主導で、全生徒による学校周辺の清掃活動を実施する。 ・ベルマークやボトルキャップ、プルタブの回収を実施する。	・ボランティア活動をおとして善行活動に対する意識を高める。 ・ボランティアの意義を理解し、自ら行動し、地域貢献等に積極的に取り組む姿勢を育む。	B	校内での活動には積極的に取り組むことができた生徒が73%であり、前年度より減少している。さらに、家庭や地域での活動については約45%であり、あまりできていないとはいえない。校内外を問わず、青陵生として自発的な活動が多く見られるように意識を高めていきたい。	今年度の環境週間では、各専門委員会において、自分たちができる活動を企画し、実践するなど、校内での活動には積極的に取り組むことができた。しかし、家庭や地域での取り組みができていないので、学校としての取り組みをきっかけに、地域や家庭でできることなどについて考える機会を設定するなどの手立てが必要である。
教育活動	○体験活動	職業観の育成	・職場体験学習を通して「働く」ことの意義や、将来設計について考えさせる。	・地域のさまざまな職場で体験活動を行い、労働の意義や喜び、苦勞などに気づかせ、自分の将来のあり方について考える契機とする。 ・体験後は、レポートにまとめて発表会を開き、各職場の特色を知る。	A	ほとんどの生徒・保護者が意義ある体験であったと評価しているため。	今年度も職業講話を行ったり、体験に向けての目的意識を持たせるための学習をしたり、体験後のまとめ・発表を通して、より学びが深まるような手立てをとった。課題は、諸事情で希望する職場で体験ができない生徒がいたり、具体的な体験が少ない職場もあり、充実した体験にならなかった生徒もいたことである。
教育活動	●健康・体力づくり	部活動の振興	・部活動加入率を90%以上にする。	・学校生活を充実させるために、部活動の意義を理解させ加入を勧める。	A	94%の生徒が部活動に加入し、たくさんの生徒が意欲的に活動している。	限られた時間の中で集中して活動し、すばらしい成果を出すことが出来た。また、78%の生徒が、勉強と部活動の両立ができていると感じている。
教育活動	●健康・体力づくり	生活リズムの確立	・3点(起床、学習開始、就寝)固定を定着させる。 ・朝食摂取を95%以上にする。	・SD(青陵日記)ノート等で生徒の生活実態を把握し、教育相談などを利用して適切に指導・助言を行う。 ・朝食の状況について調査し、朝食の大切さについて食育だより及び保健だより等で生徒に呼びかけるとともに、保護者への協力を依頼する。特に、2年生に関しては、食育講座を通して朝食の大切さを伝える。	B	アンケートでは、約66%の生徒が規則正しい生活がしたいと考えていると答えており、昨年度とほぼ同じ結果となった。また、朝食摂取に関しては、94%であり、目標の95%には届かなかったものの、良い結果が得られた。	成果としては、後期保健委員会が、マイ弁当デーを計画・実施。委員長を中心に積極的に放送での呼びかけを行った。また、食育だよりで食の重要性を伝え、食への関心を高めることができた。保健だよりをもとにした家庭での会話がなされるような取り組みを。今後も、保健委員会で作案していきたいと思う。
教育活動	●いじめ問題への対応	思いやりある生徒の育成	・相手のことを考え、正しい判断や、行動ができるようにする。	・学期に1回の生活アンケートや教育相談を実施し、生徒の状況判断に努める。 ・月に1回はいじめアンケートを実施し、いじめの未然防止に努める。	B	・月に1回程度の生活アンケートまたはいじめに関するアンケートを実施し、未然防止に努めた。 ・全校集会等で職員または生徒会によるいじめのない学校づくりを呼び掛けた。 ・いじめ事案が皆無とまではいかなかった。	・いじめ等が全くない学校づくりをめざして、今年度同様、組織で取り組んでいきたい。
教育活動	○生徒指導	規律ある集団生活の確立	・明るく元気な挨拶、時間励行、ルール・マナー遵守の定着による、規律ある集団生活を確立する。	・「人は集団の中で生きていく」ことを認識させ、日常における学校内外の様々な場面で、集団生活において守るべきことを理解させ、実行できるよう指導する。	A	・多くの生徒、保護者、職員が、明るく元気のよい挨拶や時間を守るなどの規律を守りながら、落ち着いた学校生活ができていると感じている。	ほとんどの生徒が、チャイム黙想やルールや校則を守りながら落ち着いた学校生活を送ることが出来ている。今後も挨拶の大切さを理解させ、生徒会と協力して挨拶運動などを行ってきたい。
教育活動	○生徒指導	主体的・自律的生活態度の育成	・信義礼節を重んじ、高い志と進路や将来の具体的な目標をもち主体的・自律的生活を送る。	・中高6年間を見据えた生活を送り、高校卒業後の具体的な目標をもつ。 ・自分で決めたテーマについて探究させることで、生徒の知的好奇心を喚起し、自ら学ぼうとする姿勢や学ぶ能力を育成する。	B	集会や行事などで学校目標について話をし、高い志を意欲するよう指導しているが、生徒のアンケート結果からは38%が将来を見据えながらの学校生活を送れているとはいえない状況にある。	全校・学年集会や進路講演会などを通して、生徒たちに、学校目標である高い志と未来を切り開く力を意識しながら、自分の将来について考えさせることが出来た。しかし、今以上に、具体的な本人の将来像を考えさせることが必要である。

③地域社会が期待する学校づくり(体験活動の充実)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題	
学校運営	○開かれた学校づくり	情報発信の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校だよりを月1回以上発行する。</li> <li>ホームページを毎週更新する。(学校行事後は1日以内に更新する。)</li> <li>ホームページ年間アクセス数を24000件以上にする。</li> <li>情報の満足度を90%以上にする。</li> <li>情報の発信域を10%以上拡大する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校だより等に生徒の活動状況を多く盛り込み、躍動する学校の様子をつたえる。</li> <li>学校だより等を地域の図書館等に配布し、地域の人に本校へのよりいっそうの理解をはかる。</li> <li>見たくなるホームページを目指し、生徒の日常の活動等の情報も盛り込んでいく。</li> <li>ホームページに学校の各種だより等をアップする。</li> <li>生徒参加型のホームページ作成を模索する。</li> <li>メール配信システムを利用し、保護者の知りたい情報を積極的に配信する。</li> </ul>	B	<p>青陵中だよりは、都合により後半は発行できなかった。ホームページの更新は随時行うことができた。そして、青陵中だよりははじめとする各種だよりを89%以上の保護者が読んでおり、本校の情報発信に役立っている状況が見える。また、本校のメール配信についても、約98%以上の保護者が役立っていると考えており、緊急時の連絡などに活用することができている。</p>	<p>メール配信は役立っているという保護者からの支持は高く、保護者に対する情報発信という点で、青陵中だよりなどの各種だよりとともに、非常に効果的であったと考える。ただ、各種だよりをあまり読んでいない生徒の割合が25%あり、その指導をすべきと考える。また、ホームページの更新は、タイムリーに更新を行ったが、保護者等の利用も50%にも達していないことから、情報源としてのホームページの利用を更に周知する必要がある。</p>
学校運営	○開かれた学校づくり	授業参観の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者対象の授業参観を年3回実施する。</li> <li>一般対象の公開授業を実施する。</li> <li>授業参観への保護者の参加率を80%以上にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業参観をメール・ホームページ等で積極的に呼びかける。</li> <li>授業日程だけではなく、内容等もホームページで知らせる。</li> </ul>	A	<p>保護者対象の授業参観を年2回(5月、11月)実施することができ、今年度は、参加保護者の割合が82%を超えることができた。このことから、公開授業が、本校の教育内容を理解するために効果的なものとなっていることがうかがえる。</p>	<p>今年度は、本校のICT活用教育への保護者の期待も大きく、5月、11月の公開授業への参観者が多数見られた。今後、メールやホームページなどで今以上に校内のあらゆる活動に対する情報提供を行い、保護者が足を運びたいと思える学校づくりに努めていかなければならない。</p>
教育活動	○体験活動	郷土に対する理解の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験学習や調べ学習を通して、郷土に対する理解を深めさせ、愛着心を育成する。郷土のすばらしさを再認識することができる生徒を80%以上にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>佐賀市を中心とした自主研修活動を実施し、自分のテーマに沿って調べ学習を行う。</li> <li>自分が住んでいる地域以外について調べさせ、郷土についての理解を深める。</li> <li>まとめをポスターセッションの技法を用いて発表させる。</li> </ul>	A	<p>今年度は佐賀市での自主研修の機会を設け、個人テーマに基づいて研修を深めることができた。郷土への関心や理解を深めることができた。83%以上の生徒が達成感を味わうことができた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>探究活動を通して、調査学習だけでなく、電話やインタビューのスキルも身につけることができた。また、まとめの方法として、タブレットパソコンを使い、パワーポイントでまとめる方法も身につけることができた。このプレゼンテーションのスキルを身につけるために、先輩たちの発表を参考にすることができた。</li> </ul>

## 6 総合評価

「本校に入学してよかった(入学させてよかった)」とする生徒・保護者は、ここ数年90%を超えており、本校教育活動が生徒・保護者・地域の期待にある程度応え続けてきているのだと考えられる。このことは、本校の評価項目に対する達成状況からも伺い知ることができる。また、近年、生徒会を中心として、学校行事等に生徒の自主的な姿勢、活躍の場が大いに見えてきている。また、善行活動に対する生徒の関心も強くなってきており、今後、このような状況が、バランスよくすべての活動に広がっていくよう、ある程度長期的な視野に立った方策に取り組む必要が出てきている。中高一貫教育も8年を経過したので、県教委の取り組みと合わせて中高一貫教育の今後の方向性について検証する必要がある。

## 7 来年度の改善策

本年度同様に、併設型中高一貫教育校として、校地が離れた中でのより効果的な中高交流・連携策を模索し、本校の教育目標の達成に努めたい。そのために、総括表中の評価Bの観点(具体的評価項目)について十分な検討を行っていききたい。特に、学力向上のための積極的なICT活用を含めた本校独自の新指導方法(授業づくり・課題の与え方等)の完成を目指すとともに、多様な生徒が入学してくる中で全体的な学力向上を目指したい。また、確かな改善策は模索中であるが、本校の問題点を今一度洗い出し、少しずつでも前に進めていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目